12. キャンピロバクター腸炎の臨床と薬剤感受性

菅野　治重（千大・活性研）
末石　眞，高林克日巳，柳沢孝夫
山本邦雄，鈴木　和夫
（市原市辰巳病院）
小俣政男，金沢正一郎，寺田洋臣
（千大）
小林　章男（千葉大・検査部）

市原市辰巳病院に於いて昭和55年5月より急性下痢症患者に Campylobacter jejuni の検索を行なった。同年12月までに362例の下痢患者より41例に原因菌を検出し，C. jejuni は28例と最も多く，次に Salmonella が10例であった。臨床症状では発熱，臍周囲の腹痛，水様便，便中白血球増多が高頻度にみられた。C. jejuni は EM, GM, CLDM に高い感受性を示し，PC 系，CEP 系，ST には耐性であり，治療効果でも EM が最も優れていた。

13. 清水市における非A非B型急性肝炎について

内海勝夫，高相豊太郎，金田丞亮
（清水厚生）

昭和55年1年間の当院受診非 B 型急性肝炎56例の外来患者数6765名に対する比率は0.83%であったが，横砂地区は8例2.19%，興津地区は21例2.95%と高率だった。56例中28例に HAV の抗体検査を行ない，7例を A 型，21例を非 A 非 B 型と診断したが，興津横砂地区で検査した14例はすべて非 A 非 B 型だった。興津横砂地区内では，昭和52年から55年にかけて発生中心地が清見寺から東隣の興津本町に移り，発生地域の拡大傾向が認められた。

14. GI 療法を試みた亜急性肝炎の1例

五十嵐正彦，隆　元英，上野正和
（国立習志野）

腹水と高度の黄疸を示し亜急性肝炎と診断した58歳の女性患者に GI 療法を試みて報告した。10%糖液500ml にグルカゴン2mg，インスリン20単位を加え55日間点滴して肝機能正常化を見たが，中止直後より再び黄疸増強，トランスアミナーゼ著増，血液凝固因子低下を見たので GI 量を2倍として投与，70日余で全検査結果，症状の完全な正常化を見た。本療法の効果判定はなお，投与方法を含め多数例について鎮重に行う必要があると考える。

15. 門脈圧亢進症における傍臍静脈の臨床的意義

高安賢一，小林千鶴子，志真奉夫
百瀬昌人，御園生正紀，森　博志
加藤　二郎　（国立千葉）
高瀬　潤一（同・放射線科）

各種肝疾患137例に PTP を施行し造影された傍臍静脈について検討した。同静脈は肝硬変106例及び IPH 8例の計114例中35例（30.7%）にみられ，その中34例(97.1%)の多数が門脈圧200mmH_2O 以上の門亢症を呈していた。又同静脈の走行附近に Venous hum を聴取したいわゆる Cruveilhier-Baumgarten 症候群は同静脈造影された例中2例（5.7%）であり，全門亢症例1.8%と少なかった。一方同静脈の描出に CT は有用であり，8例中7例に描出しえた。

16. 食道静脈瘤出血に対する経皮経肝塞栓術の経験

高良健司，武井義夫，斉藤輝六
北條　龍彦　（小田原市立）
木村邦夫，松谷正一，税所宏光
（千大）

食道静脈瘤出血は極めて死亡率が高く，現在まで保存的治療による確実な止血法はない。又出血時の患者の状態特に肝臓の状態が極めて不良な事が多く緊急手術の成績は不良である。我々は経皮経肝門脈造影法の応用による静脈瘤塞栓術により良好な結果が得られた食道静脈瘤出血2症例を経験した。静脈瘤塞栓術は，食道静脈瘤出血の治療として安全性・確実性が高く極めて有用な治療法と考える。

17. 局在診断の困難であった横隔膜下膿瘍の1例

小林敏生，鈴木泰俊，佐藤重明
有賀　光　（川鉄）

症例は76歳の男性で全身倦怠感，食思不振等を主訴として来院した。30年前に胃切除術の既往がある。電子スキャン，CT スキャン，膿瘍穿刺造影，PTC 等により右横隔膜下膿瘍及び胆石症と診断したが，脾臓付近の膿瘍に関しては横隔膜下膿瘍，脾膿瘍，膵尾部の膿瘍等と鑑別困難であった。手術により左横隔膜下膿瘍と判明し膿瘍内から遺残ガーゼを摘出した。また膿汁の培養を行い胆石症により発生した両側性横隔膜下膿瘍の可能性が示唆された。